

ゴムを植えることにした人たち
—— タイ東北部農村から見るグローバル化 ——

藤 田 渡 *

**Decision to Cultivate Rubber:
Globalization in a Village in Northeast Thailand**

FUJITA Wataru*

Abstract

The rapid expansion of rubber cultivation in a village in northeast Thailand since the early 2000s, spurred by the economic growth of emerging countries, is dramatically transforming the livelihoods of farmers and their link to the surrounding natural ecosystem. This article analyzes how the changes are integrating the ecological network of the villagers' living world into the network of the global rubber industry, applying the framework of actor-network theory while considering power relationships among the actors. It then discusses how the farmers can overcome their subordinate status in the global network. The knowledge of rubber cultivation provided by outside agencies works as an interface to absorb the farmers and various elements of their living world into the global rubber industry.

The doctrine of effective rubber production is also reconstructing the farmers' living world as a whole. The ecological link between the villagers and the natural world is broken, and the environment is reconstructed as part of the global network of the rubber industry. This changing process makes villagers anxious. At the same time, the villagers find it difficult to resist the allure of rubber because of the powerful prospect of a rich life. Thus, they do not welcome all aspects of the transformation in their environment.

In order to overcome their subordination to the global network and subjectively design their own living world, the villagers have to relativize the powerful doctrine of effective rubber production. In terms of balancing rubber cultivation for cash income and other livelihoods based on the local ecosystem, such as paddy cultivation and the use of natural resources for daily life, the villagers' own notion of how to adapt rubber into the ecosystem of their living world and practical ways to do this should be developed so that their lives as a whole can be secured and stabilized.

Keywords: rubber, globalization, living world, northeast Thailand

キーワード: ゴム, グローバル化, 生活世界, タイ東北部

* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科; College of Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University, 1-1 Gakuen-cho, Naka-ku, Sakai-shi, Osaka 599-8531, Japan
e-mail: watarufujita@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.54.1_3

I は じ め に

天然ゴムは、自動車のタイヤの原料など、私たちの暮らしに欠かせない物資である。近年、いわゆる新興国の経済成長に伴う需要増に呼応して、特にインドシナ半島から中国南部にかけてのいわゆる東南アジア大陸部で、急激にゴム栽培が拡大してきた。本稿で取り上げるタイ東北部のウボンラチャタニ県でも 2000 年代前半以降のゴム栽培の急拡大は目を見張るものだった。県庁所在地の町から調査地へ向かうバスの車窓からだけでも、以前、疎林が広がっていたのが次々とゴム園に変わってゆくのがわかるほどだった。

商品作物栽培による熱帯林の消失や人々の生活世界の変化は目新しい現象ではない。タイでも、特に 1960 年代以降、ケナフ、キャッサバ、トウモロコシといった商品作物が盛んに栽培され、森林消失や農村での経済的格差の拡大などを引き起こしたことが明らかにされている [Hirsch 1990; 田坂 1991; 北原 1990]。ゴム栽培の拡大も、こうした従来の商品作物の延長線上に、新たな作物が加わっただけだ、という捉え方もできる。

しかし、フィールドでの実情は従来の商品作物ブームとは異なる点が多い。一つは、ゴムによって、農民が着実に豊かになっていることである。上記のようなタイにおける商品作物と村落社会や自然資源の関係についての従来の研究では、農民は周縁化され続けるという議論が中心だった。つまり、商品作物は国際市場での価格変動が激しく、栽培する農民たちは投機的にならざるを得なかったため、高利の借金を重ね、最終的に農地を失ってしまい、国有林などを新たに占拠・開墾する。これが繰り返され、農民や自然資源はいつまでも資本主義のなかで搾取・破壊される。しかし、現在、調査地で見える限り、ゴム栽培によってこうした悪循環に陥っている農民は見られない。国際的な生産システムのなかでの搾取はなくはないだろう。それでも、農民の所得は向上し、生活スタイルも変わった。

もう一つ、従来の商品作物栽培の普及と違うのは、ゴム栽培が人々の生活世界を根本的に作りかえつつあるということである。タイ東北部の農民にとってゴム栽培は全く未知のものを受け入れるということである。そのゴムは、一度、植栽するとおよそ 25 年まで、収穫することが出来る。そのため、ゴム園に置き換えられた土地は、再度、放棄されて森に戻ることはない。モノカルチャーの空間が半永久的に維持されることになる。この間、葉が生え替わるおよそ 1 月から 3 月まで（東北部の場合）を除き、雨が降らなければ、ほぼ毎日、収穫できる。ゴムの幹に切れ込みを入れるタッピングや収穫作業は夜半から朝方に行われる。収穫できる日は 1 日も無駄にせず、より多くの収入を得られるように努めようとするので、農民の生活全般は、ゴムの収穫作業を中心に再編される。こうしたことは、キャッサバ、サトウキビ、トウモロコシ、ケナフなどの商品作物栽培では見られなかった。

こうした変化は、端的に言えば、グローバルな生産・消費のネットワークのなかに、人々の生活世界全体が取り込まれて再編されてゆく過程であろう。身近な生態環境に根ざした地域の論理はそうした動きと共存しうるのか、あるいは、それに抗うのか。本稿では、そうした関心のもと、調査地でのゴム栽培の広がりに伴う生業活動や人々と生態環境との関わりの変化を検討する。そうした動きを、特に、アクターネットワーク理論などを参照しながら、人と非人間のアクターの混交による現実の生成として捉える。さらに、その中でのアクター間の権力関係を明らかにすることを試みる。さらに、グローバルなネットワークが伸張するなかでの地域のあり方や、人々がそれに抵抗する契機について考える。

II アクターネットワークと権力

II-1 アクターネットワークとは何か

本稿では、ゴム栽培を契機とした、人々と、それ以外のさまざまな事物との関わりの連鎖のなかに、生活世界のグローバルなネットワークへの包摂とそれへの抵抗を見いだそうとする。そのための理論的な視座を整理しておきたい。まず、ブルーノ・ラトゥールらが提唱するアクターネットワーク理論である。ここで特に参照したいのは、彼らの議論の基本的な姿勢である、人間だけが構成する社会と人間以外の事物（自然）を別々の系とすることを否定し、人間、非人間のアクターの異種混交としての社会を想定すること、さらに、さまざまなアクターが関わり合うなかで変質し、事実を（発見するのではなく）作り出してゆくという点である。

ラトゥールが特に具体的に検討するのは、科学が作られる過程である。例えば、土壌の分析のサンプルを採取したり、実験を行いデータを集める。それをもとにある法則を打ち出す。そこでは、科学者が介在して現実世界の多様な現象が抽象化され、テキストへと形を変え翻訳されてゆく。これは、人間（科学者や、それにさまざまな立場で関与する人々）と非人間のアクターとが絡み合って、新しい事実が次々と作り出されてゆく過程であると考ええる〔ラトゥール 2007〕。そうして新たに作られた学説は、論文中に引用される既存の権威ある学説と関連づけられ、科学的事実としての「確からしさ」を、他の学説と競い合い高めてゆく〔ラトゥール 1999〕。そこでは、客観的には存在していたが、知られていなかった事実が「発見」されるのではなく、新たな事実が作り出されるのである。

人間、非人間の生物・モノ、出来事、概念など全てがアクターであり、それらが関係し合いながら不断に変化し続ける。そうした動態的なネットワークで新たな事実が作られ続ける。このようなアクターネットワーク理論の視角は、社会的な組織・制度の壁を乗り越えて進行する急激な変化を把握するのに非常に有効である。グローバルに展開するゴムの生産と消費を、システムとしてではなく、アクターネットワークとして記述・分析することで、一人一人の農民

が、グローバルな連関のなかにどのように巻き込まれているのかを、より詳細に理解することができるであろう。

II-2 アクターネットワークにおける権力関係

では、このような、異種混交のネットワークによる事実の制作の過程で、どのような権力が作用するのだろうか。ラトゥールは、前述のような、アクターの行為の連鎖のなかで科学的知識や社会的枠組なども含むあらゆる事実が制作される過程が、人間・非人間を包含する政治であるとする。そのなかで、すべてのアクターの声が反映されることが「民主主義」だという。政治は人間社会のなかだけでのことで、非人間の事物（＝自然）に関わる領域は、科学者の手により客観的に明らかにされるという分断は、科学者による独裁だと批判するのである [Latour 2004; 2005]。その上で、こうした、一種の「思い込み」は近代的な思想によるものであり、実際には、人間、非人間が混交した地球全体が政治、法律、道徳を作るのに関わっているのだが、そうした「非近代」な歴史を説明できる政治の定義をわれわれは持っていないというのである [ラトゥール 2007: 第 6 章]。

ラトゥールの政治や権力に関する議論は、抽象論にとどまり [Chagani 2014]、彼がいう事実の制作（あるいは、一般的にいう知識の生産とそれにとまなう世界の変化）におけるアクター間の権力関係については分析を行っていない。例えば、『科学論の實在』におけるパストゥールによる乳酸菌の発見についての考察のなかで、同僚、皇帝、資金、道具、身体的技能、発酵素、微生物、出現した卵、といったアクターが連関することで、乳酸菌という事実が制作されたとしている [ラトゥール 2007: 210-213]。こうした一連の過程のなかで、特定のアクターが、ほかのアクターの行為をより強く制約するような関係性の有無が検討されるべきだが、ラトゥールはそこには踏み込まない。

では、アクターネットワークのなかでの権力関係は、どのように分析することができるだろうか。例えば、ポール・ロビンス [Robbins 2007] は、アメリカにおいて、美しい芝生を維持する人々が作り出された経緯をアクターネットワークとして分析する。農業会社は、安全性の問題が明るみに出ると新製品を開発することを繰り返し、その都度、その安全性と効果についてメディアを通じた情報操作を行ってきた。地域コミュニティでも、住宅街としての価値を高めるためにも、各世帯が芝生を美しく保つよう、互いに牽制しあう。このようなロビンスの研究は、美しい芝生を維持する人々を作り出したアクター間の連関のなかで、少なくとも住民と会社という、人間のアクター間には明らかに政治経済的な力の強弱があることを具体的に示す。そこでは、政治的に中立な科学を科学者（ここでは薬品会社）が独占しているという、ラトゥールが「思い込み」として批判した思考が、実際には人々の間で支配的であるということが大きく影響していることを示唆する点で興味深い。

ロビンスが描出したのは、芝生を美しく保つ、という一つのネットワークにおけるアクター間の権力関係であるのに対して、アンナ・ツィン [Tsing 2004] は、複数のネットワーク間の摩擦に焦点を当てる。インドネシア・カリマンタンの森林地域をめぐる、木材や金といった資源開発を行う企業や投資家、政府機関、環境 NGO、など外部のアクターたちの連鎖の中で、森林を生活の一部としてきた人々が、資源としての森林を管理する権利を主張するようになる過程を描く。アクターたちの語りは、認識や価値だけでなく、出来事の実事関係自体でも食い違う。そうしたアクター間の摩擦 (friction) を通して、ローカルなものがグローバルなものに接続されてゆく様態が顕在化するという。森林を生活の一部とみなす人々、森林を資源として資本主義的論理で動く企業、同じく森林を資源として保護しようとする環境活動家、という別々のアクターネットワークがあり、(ネットワーク内のアクター間でも事実に関する食い違いはあるにせよ) それらの間の摩擦によって森林保護運動が展開してゆき、ローカルな人々と森林は、グローバルなネットワークに包摂されるのである。

II-3 ミクロな領域での権力の作用

摩擦を経て人々がグローバルなネットワークに包摂されてしまうというツィンの議論の枠組みに対しては、抵抗の可能性を見えなくするものだという指摘もある [Willford 2007]。ツィンの議論の枠組みのなかでグローバルへの統合を迫る力への抵抗の糸口が見いだせない理由の一つは、多点的な記述に傾斜し、抵抗の起点となりうるカリマンタンでの調査地の人々と、彼らが生活する生態環境におけるアクターネットワークについての詳細な記述・分析を欠いていることであろう。

日常的な人とモノや生き物との関係の細かなところにも、それをコントロールしようとする権力が作用する。ローカルな生活世界がグローバルなネットワークに包摂されてゆく過程での権力作用としては、国家による法やその施行のような可視的な権力よりも、フーコーという統治性 (governmentality) のような、制度的ではなく不可視で社会に散在する権力 [フーコー 1986; 2006] の方が深刻である。アグラワル [Agrawal 2005] は、インドのクマオンという地域において、森林管理の権限が村落に委譲され、村人たちが見回りなどの活動に従事するなかで森林保護の必要性を強く認識するようになっていった過程を、フーコーの統治性の概念を環境保護に援用した「環境統治性」(environmentality) という枠組みで分析する。分権化により地域住民の自発性をかき立て、地域共同体のなかで監視と取り締まりのメカニズムを働かせることで効果的に森林を保護することができた。ここに、国家が森林保護という目的のために地域住民に働きかける技法の進歩を見いだすのである。アグラワルが問題にしているのは、主として国家が意図的に行使する権力としての統治性である。しかし、実際には、グローバルな社会に埋め込まれる形で、特定のアクターの意図を離れて権力が作用し、人々をコントロール

することもありうる。グローバルな産業の連関のなかで、資本主義的合理性が生活世界に持ち込まれ、人とモノや生き物の関係性が変わってゆく。そうした変化は、アクターネットワークの間の摩擦、あるいは、そこでのアクター間の権力関係の顕現と捉えることができるだろう。

ラトゥールは、フーコーのように、科学的な知識の創出を全て人間社会のなかでの権力関係に還元する視点を、アクターネットワークの異種混交性の立場から批判する〔ラトゥール 2007: 341-344〕。つまり、科学、あるいは知識が持つ権力に人々が従属するというフーコー的な視点は、人間社会と非人間（自然）の事物とを断絶させ、異種混交な事実制作の過程としての政治という思考を停止させてしまうというのである。確かに、人間は、非人間のアクターの行為を完全にコントロールすることはできない。しかし、科学者により、非人間の事物の集積が抽象的な標本やデータに変換され、論文が生産され、それがさらに、科学者以外の人々向けの知識に変換されてゆく過程は、人間のアクター間の政治の影響を受ける。つまり、人間の政治が望む方向に向けた変換が試みられることがあり得る。ローカルな生活世界における人々と非人間のアクターの関わりが、グローバルなネットワークが持つ権力にどの程度、コントロールされるのか（あるいは、されないのか）を明らかにすることで、グローバル化に抵抗する端緒を見いだすことができるかも知れない。

ハラウェイ〔ハラウェイ 2013〕は、飼い犬のカイエヌと、アジリティという競技のトレーニングにおいてコミュニケーションを重ねるなかで、両者の境界が曖昧になり、互いが相手を構成するようになったという。そのような、異種のものが関係し合う場を彼女はコンタクト・ゾーンと呼ぶ。コンタクト・ゾーンには、種の中の権力関係が持ち込まれる危険性もある。しかし、他方で、異種間の、個体の境界が曖昧になるようなコンタクトは、種をコントロールしようとする生権力から解放される契機ともなりうる。

調査地における人々の生活世界での生き物や事物との関わり、あるいは、ゴム栽培をめぐる事物との関わりを考える場合、ハラウェイとカイエヌのような濃密な関係は想定しにくい。しかし、コンタクト・ゾーンにおいて、人々が、ローカルな生活世界に連なるアクターだけでなく、ゴムを中心としたグローバルなネットワークに連なるアクターと、どのようなコンタクトを持つのかを明らかにすることで、この末端における権力の発現と抵抗への契機の両方を見いだすことができるのではないだろうか。

次章以降、このような、アクターネットワークとそこでの権力作用に着目して、調査地において人々がゴム栽培をどのように受け入れ、あるいは、そのネットワークに取り込まれ、どのように彼らの生活世界が作り替えられているのかを検討してゆきたい。

III タイ東北部でのゴム栽培の広がり

III-1 タイ東北部でゴムが栽培されるようになった経緯

天然ゴムは、パラゴムノキ (*Hevea brasiliensis*) の樹液から作られる。パラゴムノキは南米のアマゾン流域が原産地だが、イギリス、英領マラヤ経由で1901年にタイに持ち込まれた [こうじや 2013; Disayawanit 1964]。その後、マレー半島に位置する南部や、カンボジアに連なる東部地域で栽培が広がった。一方、乾季が激しい内陸の東北部や北部では栽培されていなかった。東北部から南部へゴムの収穫の出稼ぎに行っていた人のなかには、地元で苗木を持ち帰り試しに植えた人がいたという。地元の農民や農業関係の役所での話から、1980年代と思われる。

政府も、1980年代より、東北部と北部でゴム栽培を振興することを検討していた。1970年代末から、マレーシアのゴム農園企業の多くが、ゴム価格の低迷に耐え切れず、ゴム園をアブラヤシ園に転換する計画を立てた。これは1982年に実行された。この動きを受けて、タイの農業・協同組合省農業局ゴム研究所が中心となり、将来的にゴムの市場への供給が減少するとの予測から、東北部と北部でのゴム栽培地の拡大を模索したのである。¹⁾ 1980年より、東北部と比較的気候に近いチャチュンサオの試験場を中心に植栽試験が行われ、栽培可能で収穫があるという結果が得られたので、1989年より苗木、整地費用、肥料代を支援する政府のプロジェクトが断続的に2011年まで実施された。当初、農民の関心は高くなかった。しかし、中国など新興国の経済成長にともないゴムの価格が上昇し始めた2003年ごろより、東北部でのゴム栽培は急拡大を始めた。政府のプロジェクトによる支援を受けない農園も多く開かれた。この傾向は、調査地でも概ね同様である [Fujita 2013]。

はじめ、農民の関心を得られなかったのは、価格が低かったことに加え、東北部でもゴムが育ち、収穫が得られるということを農民たちが容易には信じなかったことも大きかった。最初期より東北部でのゴム振興に携わってきたゴム基金事務所²⁾ウボンラチャタニ支所の職員は、「農民は、はじめ、イサーン（東北部の別称）でゴムを植えても“*nam yang*”（ゴム液）ではなく“*nam ta*”（涙）が出るだけだと揶揄していた」と当時を振り返る。実際には、1989年に政府が振興プロジェクトを開始する段階では、ゴムの木が東北部でも生育し、ゴム液も出ることは試験結果から明らかになっていたのだが、当初は、そういう説明も農民には受け入れられ

1) 農業・協同組合省農業局ゴム研究所の Arak Chanthuma 氏への聞き取りによる。

2) ゴム基金事務所 (Samnak ngan kong thun songkhro kan tham suan yang) は、ゴムの輸出税による古いゴムの植え替えの補助金の交付が本来の業務である。しかし、それ以外にも、政府の振興政策の末端での実務や、農民に対する研修の実施なども行っている。

なかったのである。

III-2 調査地でのゴム栽培の広がり

本稿で取り上げるゴム栽培の事例は、タイ東北部のウボンラチャタニ県シームアンムアイ郡ナムテン区ナーコー村、および、その周辺の村々での調査に基づく。同村は、タイの最東端に近く、ラオスとの国境であるメコン川に沿って南北に広がるパーテム国立公園の西側に位置する。村には約 140 世帯ある。周辺の村々は 100 世帯から 200 世帯くらいからなり、いずれも屋敷地共住集団による塊村を形成している。一帯はなだらかな丘陵地帯であり、天水田稲作が生業の中心である。水田に適さない相対的に標高が高い土地では、かつては焼畑での陸稲栽培が行われていた。近年は、焼畑耕作は途絶え、放棄後の二次林が広がっていた。タイ東北部のなかでは、森林がよく残っていた地域である。タイ東北部には、1960 年代以降、ケナフ、トウモロコシ、キャッサバといった商品作物栽培が広がったが、調査地周辺ではなぜか、2000 年代初めまであまり普及しなかった。

この地でゴム栽培が始まったのは、1980 年代後半である。ナーコーの隣村のパニアット村で数名が独学でゴム園を始めた。いずれも教師だった。そのすぐ後に、「進歩的農民協会」(Samakhom kasetrakon kao na) という NGO がドイツの NGO との共同での農村開発プロジェクトとして、ゴム栽培を支援した。パニアット村では十数名の参加者を得たという。しかし、ここから近隣の村にすぐに広がることはなかった。パニアット以外の村でゴム栽培が本格的に広がったのは、2003 年ごろからである。二次林が次々に伐開され、ゴム園やキャッサバ畑にされていった。ナーコー村の場合、ほとんどの場合、政府のプロジェクトによる支援を受けず、自己資金でのものだった。キャッサバ栽培も、ゴムとほぼ同じ時期に広まったが、単年性作物なので、苗木代などゴム栽培の資金を貯める手段、あるいは、植栽後、ゴム液が収穫できる 7 年目までの現金収入源として機能した。

III-3 ゴム栽培で何が変わったのか

ゴム栽培が広がって、ナーコー村やその周辺の村々では、何が変わったのか。大きく分けて 3 つある。一つは、人々の生業活動や生活スタイルである。ゴムは苗木を植えてから約 7 年で収穫できるようになる。ゴムの木の樹皮に斜めに切れ込みを入れ（この作業をタッピングという）、流れ出た樹液を集める。樹液は蟻酸で固めてから出荷する（南部では液のまま出荷することもある）。タッピングは気温の下がる深夜に行われる。ナーコー村では、2 日（1 日 1 回）連続でタッピングして 1 日休むパターンが一般的である。1 月から 4 月初めくらいまでの葉が生え替わる時期を除き、雨が降らなければ、このパターンでタッピングを行う。夜間、働くことが日常的となるため、昼間、森や川で自然の食材を探すより、購入することが多くなる。そ

れに伴い、特に若年層の食の嗜好も変わってくる。ゴムからの収入によって、人々の現金収入が増加したことも大きな変化である。食材を購入するだけでなく、車や大型のトラクターを購入する人も少なくない。以前は、バンコクなど都市部への出稼ぎに行っていたが、ゴム栽培のために帰村した人も多い。

反面、環境面での影響もある。ゴムを栽培するために、人々は森林を開墾した。多くは、かつて焼畑耕作を行い放棄した古い二次林である。このため、村の森林は減少した。森林の減少が洪水の増加の原因ではないかと疑う人もいる。個人の占有地として森林を多く持っていた人のなかには、その一部を、将来、資源として利用できるように森林のまま残している人もいる。しかし、個人占有地の森林は、ほとんどがゴム園になった。残された森林は、村の北側にある「コミュニティ林」（村落共有林）だけである。また、ゴムがまだ幼木の間、除草剤を散布する。それが雨で川や隣接する土地に流れ込み、汚染が広がった。そのため、魚やキノコが採れる場所が減ったという。このほか、牛や水牛の飼育も、放牧するとゴムの苗木を食べてしまうので、減少した。水田をトラクターで耕すようになったことで、水田中や水田脇の樹木野菜がなくなった。

IV ギュム産業のネットワークに組み込まれてゆくこと

IV-1 ギュム栽培の知識

ギュムはどのように栽培するのか、調査地周辺での標準的な方法を示しておく。まず、大型のトラクターで、表面から 25 cm までの土と、25 cm から 50 cm までの土が入れ替わるよう耕起する。その後、3 m×6 m の等間隔に苗木を植える。栽培されるのは改良品種であり、政府による検査を受けた専門の業者から苗木を購入する。

苗木を植えるのは、雨季の初めの 6 月ごろがよいとされている。施肥は、苗木を植えるとき、および、その後は基本的に 1 年に 2 回行う。除草は、年 1 回、草刈機で行うのだが、特に雑草の繁茂が激しい 2 年目から 3 年目には、除草剤を使う人も多い。こうして手入れを行い、7 年目（木の生育にもよるが）にギュム液の収穫が始まる。ギュムの木の樹皮の部分に斜めに 30 度から 35 度の角度で切れ込みを入れ、流れ出る白い液をカップにたまるようにする。このカップにたまった生ギュムは、集めて板状に固めるか、カップの中で固めて仲買業者に売る。2013 年以降は、後者がほとんどである。

村人の間に普及しているギュム栽培に関する知識は、ギュム研究所からのものが中心である。また、苗木や肥料、農薬などを販売する業者が農民に宣伝も含めさまざまな知識を伝授する。さらに、先行してギュム栽培を行っている人から後発の人に口コミで知識が伝えられ広まってゆく。実際に農民の実践を見ていると、基本的には、農業局が推奨する方法に従ってギュムを栽培して

いるが、一部で異なるところもある。多様なルートからの知識が混在しているからである。

しかし、苗木の品種、植栽・栽培方法、タッピングの方法など、ほとんどの知識は、業者のものも含め、元はゴム研究所によって作り出され普及させられたものである。ゴム研究所では、マレーシアなど外国から持ち込まれた品種や、国内で新たに交配した品種の栽培試験を継続して行っている。植栽間隔、施肥方法、タッピングなどに関しても、実証試験を行っている。前述のように、従来、栽培地が南部・東部に限られてきたゴムを東北部・北部といった、気温も低めで明瞭な乾季がある地域で振興するにあたり、その 10 年前から各種の栽培試験を行っている。その後も、そうした新規栽培地に適した品種の開発なども進んでいる。³⁾ そうした試験によって得られたデータに基づく「科学的」知識が、農民向けのパンフレット類や研修によって普及させられる。パンフレット類は、植栽、品種、施肥、タッピングと収穫、病虫害、といった項目ごとに分冊になっており、いつ、何を、どれだけ、どうすればよいか、写真入りで具体的に説明されている。研修は、新規栽培地の東北部・北部を中心に、ゴム研究所に属するゴム研究センターのほか、ゴム基金事務所と地方自治体との連携により、ゴム基金事務所の職員が出張する形で行われている。試験研究が進むにつれて、そうしたパンフレットや研修の内容にも修正が加えられてゆく。

さらに、ゴム基金事務所では、2010 年から、各地でゴム栽培経験の長い農民を「クルー・ヤーン」(*khru yang*、「ゴムの先生」の意)に任命し、新たにゴム栽培を始めた農民への助言やゴムの生育状況の追跡を行わせている。また、ゴム研究所でも、2008 年以降、東北部に 5 カ所、北部に 4 カ所の学習センターを設置し、職員と農民代表との間で話し合いながら、研修の計画を立てたりしている。このように、近年では、公的機関と農民との情報交換が密に行われるような仕組みが整備されてきている。⁴⁾ 研究機関で「科学的」に正しいとされた知識を、彼らの経験を織り交ぜ、翻訳して農民に伝えようとしているのである。しかし、ナーコー村やその周辺では、クルー・ヤーンや学習センターの活動はほとんど見られない。従って、公的機関からの知識の浸透圧は、比較的、低い地域だと言えるだろう。とはいえ、後述のように、人々は、公的機関が開発した栽培法を自発的に何らかのルートで取り入れ、実践している。

タイのなかでゴム栽培が古くから行われてきた南部では、当初は、このように、公的機関が開発し普及させた「科学的」な知識に従った栽培が行われていたわけではなかった。品種改良が行われる前の在来品種の種子を直接植え、施肥や草刈りなども行わず、ゴム以外の樹木も多く残した粗放なゴム栽培が行われていた [Disayawanit 1964: 210]。1960 年の「ゴム基金」設立以降、ようやく改良品種への植え替え促進策と栽培方法に関する指導が行われるようになった。

3) ゴム研究所に属するゴム研究センターでの聞き取りによる。

4) ゴム研究所に属するゴム研究センターでの聞き取りによる。

た。1965年にハジャイにゴムの研究所が設立され、タイ国内で育種や栽培技術の試験研究も行われるようになった [Khongsin n.d.]。こうした「科学的」栽培によって、生産性が向上している [末廣・重富 1989: 117]。私が聞き取りを行った南部スラートタニー県の農村でも、かつて粗放なゴム栽培は僅かに行われていたが、収益が低く誰も関心を示さなかったという。1970年代以降、改良品種による現在と同じようなゴム園が政府の振興策もあって広がったが、それは、彼らにとって、消費生活を支えうる初めての現金収入源として、昔のゴム園とは別種のものと捉えられたのである。現在では、「科学的」な知識に基づき、なるべく効率よくゴムを生産するための栽培方法が定着している。東北部にゴムが入ってきたのは、「科学的」栽培が定着した後であった。

IV-2 ポン一家のゴム栽培

村の人々にとって、ゴムは元々、馴染みのない作物だった。よって、彼らは、ゴム栽培を始めるに当たり、外部の知識に依存しなければならなかった。そうした知識を受け入れて実践することが、即ち、ゴム産業のネットワークに組み込まれることである。ただし、いつまでも外部の知識の言うままに実行するのではなく、それを徐々に経験知化してゆく。その過程で、アクター間の権力関係に変化は起きているのだろうか。ここでは、そうした視点から、ナーコー村のポン一家を中心に、村の人々がゴム栽培を受け入れ、ゴム産業のネットワークに組み込まれてゆく過程を見る。

ポン一家は、ポン（夫）、オイ（妻）、二人の息子の4人家族である。夫婦は、家の裏側にある水田のほか、集落の北側、西側、2カ所のゴム園を持っている。北側のゴム園は、2003年から植栽を開始した。面積は約20ライ（3.2 ha）あり、うち15ライでタッピング・収穫が行われている。西側のゴム園は、2011年から2013年にかけて植栽したので、まだ収穫期には達していない。

すでに収穫が行われている集落の北側のゴム園は、もともと、妻の父が焼畑の休閑林として持っていた土地である。2001年に、村外の実業家がパパイアを栽培するためにこの休閑林を借地し、開墾した。2年間の借地契約期間が終了した後、戻ってきた土地に何を植えたらいいか、妻の父らとともに思案していたところ、隣のパニアット村の親戚ソムティンの勧めでゴムを植えることにした。その際、妻の父は、土地の一部を、妻の弟とポンに分けてくれた。集落から北に続くラテライトの道路沿いに約2 kmのところに隣接して妻の父、弟、ポンの三家族のゴム園がある。そこまでの間、両側にほぼびっしりとゴム園が続く。これらのゴム園は、みな、2003年以降に植栽された。苗木を購入する資金を貯めながら、順次、広げられてきた。現在ではさらに奥までゴム園が広がっている。

現在、ゴムのタッピングや収穫はすべて夫婦で行っている。2013年には、妻オイの親戚の

ティアムに、50 対 50 の分益で、タッピングと収穫の一部を請け負わせていた。ティアムのゴム園がまだ植栽後 5 年目で、収穫可能な時期に達していなかったからである。しかし、ゴム価格が下落したので、余裕がなくなり、2014 年にはすべて夫婦で行うようにし、ティアムはオイの父のゴム園を手伝うようになった。

ポンらは、当初、ゴム園の造成、植栽、栽培などのほとんどの知識を、すでにパニアット村で長年、ゴムを栽培してきた親戚のソムティンに頼った。ソムティン自身も、ポンたちの土地に隣接して新たに自分のゴム園を開いたこともあり、ポンたちは、逐一、ソムティンに教えてもらい一緒に作業を進めた。苗木を購入する際も、共同で大型のトラックを雇い、県南部シリントーン郡の業者のところに行き、偽物ではないことをソムティンに確かめてもらった上で一緒に買った。ポンらは、ソムティンの言う通りに実行した。ソムティン自身は、前述の「進歩的農民協会」のプロジェクトに参加してゴム栽培を始めたので、そのプロジェクトや、その他、研修によって学んだ知識に、彼自身の経験に基づき多少の修正を加えている。外部からの知識が、ソムティンによって、彼の経験と混ぜ合わされて翻訳・変成された。ポンは「ソムティンが自分たちのゴムの先生だ」と言う。つまり、その知識の由来ではなく、ソムティンが長年、ゴム栽培を行い、成功を収めてきたこと、および、ソムティンが親しい親戚であることが、信頼の根拠となっている。ただし、その中身は、効率よくゴムを生産するためにゴム研究所などで研究開発された知識のパッケージをもとにしている。グローバルなゴム産業のネットワークは、時に、こうしたローカルな人間関係を媒介にしながら人々をその一部に組み込んでゆく。もちろん、村では、違った経路でゴム栽培に関する知識を得ている人も多い。以下、そうした違いも踏まえつつ、具体的な項目ごとに見て行きたい。

IV-3 肥料をどのように入れるのか

ゴムの苗木は、植栽時と、その後は、年に 2 回から 3 回に分けて施肥をすることが推奨されている [ゴム研究所 2012: 61]。ポンたちは、以下のような、ソムティンに教わった方法通りに行っている。まず、植える際には、苗木 1 本につき、スプーン 1 杯くらいの肥料を入れる。その後、2、3 カ月後にさらにスプーン 2 杯から 3 杯の肥料を施す。その後、1 年目は木から 20 cm くらいのところに 3 カ所から 4 カ所穴を掘り、一握り分の肥料を分けて入れる。2 年目は、木から 50 cm くらいのところにやはり 3 カ所から 4 カ所穴を掘り、どんぶり 1 杯分を分けて入れる。3 年目はこれをどんぶり 2 杯分に増やす。4 年目も 3 年目と基本的には同じだが、成長が悪いときには多めに入れる。5 年目以降は、平坦な土地なら、穴を掘らなくてもよいが、ポンの土地は傾斜があるので、やはり同じように穴を掘って入れるようにしている。肥料の成分については知らず、肥料会社が、タッピング開始前・後により、それぞれ、配合したものを購入している。

これは、ゴム研究所作成のパンフレット、『ゴムの施肥へのアドバイス 2011 年版』[ゴム研究所 2011] と大きくかけ離れてはいない。しかし、パンフレットでは、化学肥料の成分を、例えば、タッピング開始前なら、砂質土壌の場合は 20-10-12（窒素・リン酸・カリウムの含有比率）、粘土質の場合は、20-10-17 などと明記してある。施肥量はスプーンやどんぶり何杯ではなくグラム表示で、場所も何センチ離れているか、ではなく、樹冠の端の位置とある。これらは、ソムティンに知識が伝わる過程で、あるいは、ソムティン自身によって、多少の変成をともしないながら、よりわかりやすく翻訳されたのであろう。

ほかの村人のなかには、タムボン自治体⁵⁾や郡農業事務所による研修に参加した際に、肥料について教わった、という人もいる。例えば、ピアオは、2005 年にゴムを植えた。彼は、タムボン自治体での研修に参加した際に、タッピングに加えて肥料についても教わった。講師は、「1 年目から 5 年目までは 100 g につき、窒素 20 g・リン 10 g・カリウム 12 g のものを、6 年目は 25 g・10 g・10 g のもの、7 年目（タッピング開始）以降は 29 g・5 g・18 g のものを使う。量は、普通は 1 本につき 500 g、土地がやせているときは 700 g から最大で 1 kg 入れる」「肥料は、その成分の割合になるように自分で配合したほうが（配合済みのものより）安くつくので、そうすることを勧める」と言っていたという。6 年目の成分がパンフレットと異なるのは、まだ、パンフレットに反映されていない最新の研究成果を講師が伝えたのであろう。⁶⁾ それまでピアオは、苗木販売業者（肥料も取り扱っていた）に勧められるまま既製品を使っていたが、この研修参加後は教えられた通りのやり方に変えた。一方、2012 年にゴムを植えたチャックは、タムボン自治体のもののほか、郡農業事務所の研修に何度も参加している。彼は、ゴム以外の研修の際にも、講師にゴムの栽培法について積極的に質問するようにしている。ここでは、幼木のうちは、化学肥料を一部、使用するものの、成長後は有機肥料だけでよいと教わった。⁷⁾ 彼は、基本的には研修で言われた通りにしているが、ほかの人が使ってよかったという肥料があれば試したりもするという。

このように、人々は、自分が接点を持っているチャンネルのなかから、知識の持ち主が実際にゴム栽培で成功している、あるいは、公的機関のように一定の信頼性がある、といった要因で使う知識を選択する。しかし、どれを選ぶにせよ、当初は基本的に一方的で、その知識が示す通りに実行するしかない。つまり、その知識に従属することになる。

5) 区 (*tambon*) ごとに設置された地方自治体である。

6) ゴム基金事務所ウボンラチャタニ支所での聞き取りによれば、講師自身の判断で一般には公開されていない最新の研究成果を農民に紹介することがあるということだった。

7) これは、化学肥料を主とし、補助的に有機肥料を使う、とするゴム研究所の資料とは違う [ゴム研究所 2011]。郡農業事務所での聞き取りでは、農民が少しでもコストを減らせるよう、可能な限り有機肥料を薦めるという。

IV-4 施肥の知識の経験知化

2013 年 9 月、ポンの妻オイが肥料を買いに行くのに同行した。ポンは行かず、親戚の女性プーと連れ立ってであった。車で 30 分ほどかかる、郡役所のあるシームアンマイの町中の店に行った。農作業に使う器具のほか、さまざまな種類の肥料が売られている。その日は、最近、違う土地に新たに植えたゴムの幼木のための肥料を購入するつもりだった。出かける前に、オイはポんに、「プラーニン・トーン（肥料の銘柄）でいいね?」と聞いたものの、ポンは肥料の銘柄はよく知らないで、「んー」と曖昧な返事しかなかった。オイは、これまで使ってきた「プラーニン・トーン」を購入するつもりだった。しかし、店員は、「ヤーラー」という別のものを薦めた。曰く、1 年目から 4 年目までの幼木に使える。自分も入れてみたが、葉が「緑 (*khiao*)」(この部分を強調)になる。オイはしばらく思案していたが、その間も、この店員は「緑」という語を繰り返し、しきりに「ヤーラー」を薦めた。「プラーニン・トーン」は 5 kg の袋が 910 バーツ、「ヤーラー」は 1,020 バーツと「ヤーラー」のほうが少し高い。結局、オイは「プラーニン・トーン」「ヤーラー」、それぞれ 5 袋ずつ買い、別々の区画に入れて試してみることにした。後日、その結果について聞いてみたが、オイは「どちらも同じだった」と言っていた。

最初は、外部（この場合は肥料店）に従属するしかないが、受け入れた知識を反復的に実践し、その結果を自らの眼で直接、経験することで経験知化する。オイは、「プラーニン・トーン」については、そういう意味での経験知を持っていた。しかし、また、新たな知識・情報・商品が作られると、不確実ななかでの判断を迫られる。オイは、店員の薦める新製品の知識をそのまま受け入れるのではなく、比較実験を行ったのである。

オイが肥料を買いに行った 2 日後、ポンは村の西側にある新しい方のゴム園を見に行った。ここでは、2009 年、2012 年、2013 年（その年）、と順次、ゴムを植栽していた。同行していた私に対して、ポンは苗木の生育状況を確認しながら、「これは、（肥料を入れるのが）近すぎる。これはよくない」と教えてくれた。少し前に妻のオイが施肥をした跡だった。植えたばかりの幼木なので、木から 20 cm のところに肥料を入れるべきだが、少し、近すぎたというのだ。しかし、溶け出した肥料の跡が広がっているだけで、素人目にはよくわからない。ポンは続けて、「肥料を入れるとそこが熱を帯びる (*ron*)。肥料を入れるのが木に近すぎるとその熱で木に火が通ってしまう (*suk*)」と言った。そのほか、（どの成分にせよ）成分の含有率が高い「固い」(*khaeng*) 肥料は、成分が一気に土壤中に溶け出すのでよくない。有機肥料を混ぜたものの方が徐々に成分が出るので木に十分に行き渡るからよい。「満腹する以上にご飯をあげても食べられなくて流れていってしまう」ので、本当は、1 年に 1 回から 2 回ではなく、より多くの回数に分ける方がよい（けど、手間なのでできない）、など、一通り、施肥について解説してくれた。苗木の成長には個体差があるので、植えてすぐの間は、定期的に様子を見

に来る。葉が青々としていれば、新芽が出て、高さも太さも増してゆく。成長が遅い木には肥料を入れてみて、それでもだめな場合は新しい苗木を植え直すという。ポンの目には、施肥の具合と苗木の成長とが関連づけて見えている。これまでの施肥の実践とその結果を身体的に経験し、ソムティンから教わった知識が経験知化されてきたのである。彼の説明の中には、同じ量を多くの回数に分けて施肥するほうがよい、など、自身では実行していない知識も含まれている。しかし、実行していないまでも、これまでの経験に照らしてその妥当性を判断しているのである。「熱を帯びる」「固い」など、身体的感覚による理解を示す語を用いていることも、その証左であろう。

このように、自ら実践し身体的にその結果を経験することで外部の知識を経験知化する。それにより、外部の知識への従属は弱まる。しかし、一方で、経費をかけて肥料を適切に投入し、なるべく効率よくゴムの木を生育させゴム樹液を生産しなければならない、というゴム産業のネットワークに内在する論理をも同時に身体化しているといえよう。

IV-5 苗木の選択

肥料と並んで、農民が外部からの知識を一方的に受け入れなければならないのが苗木の品種である。ボンが植えたのは RRIM600 というマレーシアが開発した品種で、これが長らく一般的だったが、RRIT251 という新たな品種が開発された（人びとは単に「600」「251」と呼ぶ）。

前述のピアオが8年前にゴムを植えたときにはすでに251もあった。彼は、「苗木業者が、251は土地には向かないと言ったので、結局、600にした。しかし、後に研修に参加したときに講師にこの件を質問したところ、251の方がゴム液の出がよいという。苗木業者は自分の経験だけで言うが、（講師の派遣元の）ゴム基金事務所は、試験をしてから言うから確かだ」と言う。最初、ほかの選択肢がない時には、苗木業者の知識に従属するほかない。しかし、後に公的な機関による試験を経た知識が現れ、さらに、身近なところで実際に植えた人からの情報も加わると、苗木業者の知識は信じるに足りないものとなった。「彼（苗木業者）自身の経験だけで言う」知識であることは、最初からわかっていたにもかかわらず、である。対立する知識が現れ、しかも、そちらの信憑性のほうが高いと判断される要素が多ければ、「事実」が変わる。

ただし、苗木の場合、一度植えると25年間、植え替えはない。⁸⁾つまり、肥料のように比較的短期間で実践とその結果、という試行錯誤を重ねて経験知化することができない。25年後に、また、新しい品種が開発されていれば、どの品種が最良かという「事実」は、農民が経

8) 苗木の生育が異常に悪い場合には、1年から2年目で植え替える。しかし、そういう個体差による問題を別にすれば、苗木の品種の違いを実感するのは、タッピング開始後の収量によってでしかない。そこから植え替えを行うことは、7年間の生育期間を考えると現実的ではない。

験により身体化したものとしては存在せず、何か外部の知識に従属するしかない。

IV-6 タッピングをいつ行うか

ゴムは、植栽後 7 年で収穫可能となる。ゴムの樹皮に専用のナイフで斜めに切り込みを入れると、切れ込みから出た白い樹液が流れ出る。切れ込みの一番下の端から地面に向かって垂直に切れ込みをのばし、その先にご飯茶碗くらいの大きさのカップを据え付けておきこの液を受ける。タッピングは、葉が生え替わる 1 月から 4 月を除き、ゴムの木の幹が濡れるほどの雨が降らない限り、2 日連続で行い 1 日休むというサイクルで行うことが多い。⁹⁾ 前回の切れ込みのすぐ下を順に切っていくので、樹皮には平行四辺形の痕が広がる。タッピングは通常、気温が下がり、ゴム液の出がよいといわれる夜間に行われる。ポンたちは、タッピングをする日には、集落内の家で夕食をとり午後 9 時ごろから 12 時ごろまで眠る。その後、バイクでゴム園に向かう。ゴム園脇の家でコーヒーを飲んでからタッピングにとりかかる。ポンのゴム園には 2,000 本の木があり、このうち、収穫可能なのは 1,500 本である。2013 年には、これをポン、オイ、ティーム（請け負っている親戚）、の 3 人で一人 500 本ずつタッピングしていたが、2014 年 8 月の時点では、ポンとオイの夫婦 2 人だけで行っていた。1 本をタッピングするのに、30 秒くらいかかる。およそ 1 時間に 120 本、1 時に開始すれば、終了するのは、3 人の時で 5 時過ぎ、2 人なら 7 時過ぎ、という計算だ。

ただし、これは、あくまで順調に行えた場合である。夕方以降に雨が降り、ゴムの木の幹が濡れると、その日の夜はタッピングができない。タッピングによって出たゴム液がうまくカップに入らないからである。そのため、人々は常に天候を気にしている。雨が降っても、それが樹皮を濡らす程度なのかどうか、雨の強さを注意深く観察する。大丈夫だと思い、タッピングを開始しても、途中で雨が降り、中断することもある。カップに雨水が混入すれば、せっかくタッピングしたものが無駄になってしまうからだ。私がタッピングに同行した日にも、午前 2 時ごろ、雨が降ってきたので、タッピングを一時、中断した。3 人は、声を掛け合い（こだまするので、何と言っているのか聞き取れなかった）、家の脇にある休み屋に戻った。しばらくすると降り止んだので、午前 2 時 45 に再開した。もう、それ以上は降らない、という判断したからである。

このほか、大雨の日が続くと、人々はまったくタッピングができず、収入が途絶える。2014 年には、6 月、7 月と雨が降り続き、ほとんどタッピングが出来なかったという。特に夕方から夜にかけて雨が降った。晴れ間にゴムの樹皮が乾くと、人々は日中でもタッピングを行っていた。日中は気温が高くなり、ゴム液の出が悪くなるが、少しでも収入を得るためである。途

9) ゴム研究所の資料にも一つのオプションとして示されている [ゴム研究所 2012]。

中で雨が降ると、中断し、すでにタッピングした木のゴム液がたまったカップに蟻酸を入れて固めてしまう。再び雨が降り止んで樹皮が乾いたら、残りの木のタッピングを行うのである。

このように、雨季の間、降雨とゴム園の状況を予測しながらタッピングをいつ行うのか決定する。雨の激しさや降り続いた時間から、ゴムの樹皮が濡れているかどうか見当をつける。あるいは、一旦、降り止んだ時に、また、すぐに降りそうかどうかを予測する。こうしたことは、教科書的に教えられるものではなく、日常の経験の蓄積により構築され、変化し続ける経験知である。彼らは、いかにゴムを少しでも無駄なく効率的に生産するか、というゴム産業のネットワークに内在する論理に従い、自然との関わりにもとづく経験知をそれに接続させているのである。

IV-7 タッピングの技術

では、タッピングの技術面ではどうか。タッピングは、適切な幅（目測では5 mm 程度）の樹皮を均一に削りとる。また、切るのは樹皮の部分だけで、その下の木質の部分を傷つけないようにする必要がある。ポン、オイ、ティアムともタムボン自治体の実施した研修に参加している。研修は1週間で、まず、1日目は、ナイフの研ぎ方だけ教える。2日目からタッピングの実習に入る。それまでゴムのタッピングは未経験だった彼らは、最初、どう感じたのだろうか。

「ナイフを研ぐのが難しかった」（ポンとティアム）

「研修では、講師は『30度の角度で切るのが原則だけど、できなくても別に大丈夫』と言っていた。あとは、どの程度、切ればちょうどよいのか（の加減が難しかった）」（ポン）

「切り方が少なくて液が出なかったり、切りすぎたり、と最初は難しかった。実際に（自分のゴム園で）タッピングをやり始めてからも、*bat*（深く切りすぎて木質を傷つけてしまうこと）としてしまうことがあった。1年、2年とやるうちにできるようになった」（オイ）

講師も、未経験の農民にとって最低限必要な事柄を念頭に、柔軟に指導していたことがうかがえる。また、研修だけでなく、それ以降、実践のなかで試行錯誤を繰り返しながら上達していったことがわかる。タッピング作業中に、オイは、これまでのタッピング痕に触れながら、「これ（表面が瘤のように盛り上がっている箇所）が傷になった部分。（上のほうの）始めのほうは多いでしょ。今は少なくなったけど、でも、たまにやってしまう」と言った。深く切りすぎた時には、ナイフを持つ手の感覚でわかるという。ゴムの木の傷跡とそのときの記憶・感覚がリンクしているのだ。

タッピング作業は、夜間、眠気に耐えながら、長時間、集中して行う必要がある。そのため、タッピング作業中に急病になることもある。実際に、同じナムテン区の別の村で作業中に亡くなった人もいるという。ポンたちは、いざという時に救助できるように、必ず複数名でタッピ

ングを行うようにしている。また、仮に他人に請け負わせる場合でも、酒を飲む人には絶対にさせられない、という。

ポンらとは違って、研修などには参加せず、あくまで実践のなかで技術を身につけたという人もいる。同じくナーコー村で父が植えたゴム園のタッピングをしているソムは、ほかの人がやっているのを見て、また、木を見ながら覚えた、という。「ゴムの木は一本一本違う。大きい木も小さい木もある（から、やりながら覚えるしかない）。研修に行ってもできない人もいる。最初の頃は間違えたこともあるが、あまり難しくはない」というのである。オイは（特定の人に対してではないが）こうした態度に批判的で、「『自分でゴムの木と話す』と言って研修に参加しない人もいるが、そういう人は、自分が見ている限り、うまくいっていない」という。一方、ヌイは研修には参加したが、研修自体は技術（*fi mue*）には関係ないという。技術はあくまで慣れによって身に付くもので、研修で習うのは「知識」（*khawam ru*）だという。知識の裏付けを得て自信をつけることができるというのだ。

IV-8 ゴム産業のネットワークに取り込まれる/抵抗する

このように、ゴム栽培を行うにあたり、村の人々は、当初は、外部の知識に従い、それをそのまま実行するしかない。それが、徐々に経験知化されることで、従属が解消される。しかし、ここで、時間が問題となる。つまり、苗木の品種のように、一度の実践のサイクルが長い場合には、人々は外部の知識を経験知化することができない。よって人々は外部の知識に従属し続けるしかない。一方、肥料の銘柄（自分で配合する場合も含む）は、新しい銘柄や配合方法も開発されてゆくなかで、人々も短期間で実践を繰り返し、その結果を経験として蓄積し、経験知化することができる。

他方で、タッピングに関しては、天候の予測、タッピングの技術とも、その中核は、言語化できない。ヌイが言うように、言語化されたマニュアルの通りに実行すればよい肥料や苗木の「知識」と違い、タッピングは本質的に身体技法、つまり「技術」である。研修で練習するのは入り口に過ぎず、その後、経験を積み重ねることで習得される。それでも、オイのように、最初の研修で正しい技法を（少なくとも「知識」として）教わることを重視する人もいる。彼女にとって、教わった正しい知識は、毎日の実践のなかで自らの身体に刻み込まれてゆくのであろう。このように、タッピングの技術の習得と研修との因果関係は多義的である分、知識の権力性は脆弱である。

一方で、人々が外部の知識を経験知化してゆくことは、効率的にゴムを生産するというゴム産業のネットワークに内在する論理を身体化してゆくことでもある。外部の知識に従属しながらそれを身体化する。天候に関する経験知を投入して雨の降り方を予測する。タッピングの身体技法を身につける。これらはすべて、この村の自然条件の下でゴム生産の効率を最適化する

ためである。このようにして、村人たちは、ゴム産業のネットワークに組み込まれてゆくのである。

V 再編される生活世界

V-1 なぜ、ゴムを植える（た）のか

ゴム栽培は、さまざまな知識、技法、モノのパッケージとして人々の生活世界に入ってきた。それらの事物は、より大きなゴム産業のネットワークの末端であった。前章で見たように、人々は、ゴム栽培を始めることで、そうした事物を彼らの生活世界の一部として受容するというより、ゴム産業のネットワークに取り込まれていった。もう一つの側面として、ゴム栽培以外の、村の生活世界全般が、ゴム栽培を軸に再編されていった。

すでに述べたように、当初は、政府の振興策にもかかわらず農民のゴムへの関心は低かった。しかし、2000年代に急激に栽培が拡大した。これは、タイ東北部の全般的な傾向であり、調査地にも当てはまる。では、人々はどのような経緯でゴムを植えようと思ったのだろうか。

この地域に初めてゴムが入ってきたのは1980年代末のことである。ナーコー村の隣のパニアット村でのことだった。1989年、元教師が村人から未開墾の土地を買いゴム園を開いた。その翌年、シームアンマイにあるNGO「進歩的農民協会」が、ドイツのNGOとの共同でゴム栽培振興のプロジェクトを実施、パニアット村で参加者を募り、研修を行い、整地や苗木・肥料購入の費用を無利子で融資した。パニアット村では10名ほどの参加者がいたという。同村在住のソムティンも参加者の一人だった。彼は、プロジェクトの支援で1990年に5ライ、1991年にもう5ライのゴム園をつくった。当時は不安もあったが、焼畑跡の休閑林が100ライあったので、その一部に試しに植えてみたという。1997年にタッピングができるようになり、収穫もよかったので、その後も、自己資金で徐々に拡張してきた。

ポンたちも、そういう様子を見ていた。「(ポンがゴムを植えた2003年当時)パニアット村の親戚(ソムティン)は、裕福とはいえないけど、外で賃労働をする必要がないくらいの収入はあった。外で働く必要がなければ自分の自由な時間も持てる」。ゴムを植える以前は、ポン夫婦はバンコクなどへ出稼ぎに行っていた。近くに農園を持つ家族もみな夫婦で行っていた。2003年当時、まだ、ゴムの価格は低かった(約35バーツ)が、ゴムは(南部だけではなく)ここでも生育し十分収穫でき、出稼ぎに行く必要がない程度の収入が得られることを、親戚の暮らしぶりを目の当たりにすることで、直接、確認した。そこで、自らもゴムを植えることにしたのである。ポンたちは、その成果を2010年に初めて手にする。2003年当時、中央市場の価格が1kgあたり30バーツだった。「収穫を始めた年(2010年)には60バーツ、その次の年には160バーツになった。それで、2年前(2011年)にゴム園に家を建て、去年クボタのト

ラクターを買い、今年はピックアップトラックを買った。全部、ゴムのお金だ。ゴムがなければこんな風にはできなかった」とポンはいう。

2012 年以降、価格は下落した。それでも、ピックアップトラックのローンの支払いも含め、生活に困窮することはなく、2013 年にはさらにゴム園を拡張しているくらいである。実は、2013 年 9 月には、南部の農民が政府に対し、ゴムの価格下落問題の解決を求める大規模な集会を開き、幹線道路の封鎖を行っていた。2011 年の最も高い時には 1 kg 当たり 180 バーツを超えた価格が、この時には 75 バーツまで落ち込んでいた。ポンほか、数人のゴムを栽培している人たちとの会話の中でもこの事件に触れ、いくらまでなら生活できるか聞いたところ、彼らの一致点は、「(ハートヤイ中央市場の価格で) 40 バーツまでなら大丈夫」ということだった。それだけあれば、例えば、車のローンなどを返済しても、まだ、贅沢しなければ生活できるという。75 バーツは、彼らにとって、まだ、十分に利益のある価格だった。ゴム価格はその後さらに下落したが、中央市場の価格で 40 バーツは切っていない。2014 年 8 月には、価格低迷に加えて降雨続きで、さすがに困った様子だったが、なんとか生活できているようだった。

多くの人びとが最近、ゴムを植えたのはこの高価格のためだ。しかし、単に価格についての知識・情報によってではない。実際に近くで栽培している人が成功し、その結果、「(ゴムを植えている人が) 車も家も持っている」ことを直接、見るのが重要だった。

農民だけではない。ナーコー村も含むナムテン区全体を管轄するナムテン地方警察署勤務の警察官ノイは、1995 年にパニアット村の人から土地を買い、2005 年に 7 ライ、2009 年に 11 ライ、ゴムを植栽した。彼は、さまざまな作物の市況を見比べてゴムを選んだ。農作業は全て近くの村の人を雇っている。話を聞いた 2012 年 2 月時点で、この警察署の全職員 27 名のうち、20 名がゴム園を持っていた。近くの学校や森林関係の事務所でもおおむね同様とのことだった。さらに、南部から比較的安い土地を求めてこの地域に来て、ゴム園を開く人もいる。ナーコーの隣のチャート村では、県南部のナムユーン郡の人がコミュニティ林を不法に開墾してゴム園にするという事件も起きた。私の知人が想いを寄せていた村の娘は、南部からきてシームアンマイで大きなゴム園を営む人に嫁いだ。こうした一つ一つの出来事の連鎖は、ゴム・ブームといってよい状況を生んだ。農民も、役人も、学校の先生も、みな、ゴムを植えた。村の外からも植えにきた。それがうまくいっているのを見て、ほかの人もまたゴムを植えた。すでに植えている人も、さらに、広げていった。

公務員などを別にすれば、ゴムを植えるに当たって、即断で苗木を購入できる人は少なく、何年かキャッサバを栽培し、そのお金で苗木を買うことが多い。植栽後も 7 年目までは肥料代などがかかるだけで収入がない。そのため、一部、キャッサバ畑を残している人が多い。ポンのように、牛を売ってその間の費用に充てた人もいる。ブームのなかにあっても、人々は計画的にゴムを植えていった。ゴムをすでに栽培している人の暮らしぶりを日々、目の当たりにし

ていることがそうさせたのである。ソムティンら、パニアット村で最初にゴム栽培を始めた人たちにとっても、ポンのようにその後が続いた人たちにとっても、ゴム栽培とは、すでに確立された知識・技術のパッケージを受け入れることに他ならなかった。そういう物事の連鎖だけを目の当たりにしていたからである。

V-2 ゴム栽培の広がりにもなう環境や生活の変化

以前、人びとは、水田で米を作り、水田や川、周りの森などで魚、動物、昆虫、キノコ、タケノコ、山菜などをとって副食物にしていた。ナーコー村では、村にあった森のうち、村人が共同で管理・利用するコミュニティ林だけは守られているが、それ以外の森はほとんどが開墾された。2012年にナーコー村で質問紙調査を行った。全137世帯のうち109世帯で回答を得られた。その内、59世帯がゴムを栽培していた。この59世帯のゴム園は合計664ライ（106 ha）だった。これらのゴム園が、いつ開墾され、ゴムを植えられたのかを示したのが図1である。2003年頃より、開墾、ゴムの植栽とも、急増しているのがわかる。開墾時期が植栽に先行しているのは、まず、開墾後の数年間は、キャッサバを植え、苗木を購入する資金を貯めたり、一部はゴム植栽後もキャッサバ畑として残して、ゴムが収穫できるようになるまでの間の収入源とすることが多いからである。これは、全て、かつて、まばらに行われていた焼畑耕作の放棄後の二次林が、一気に開墾されたものである。周辺の村々もほぼ同様の状況である。

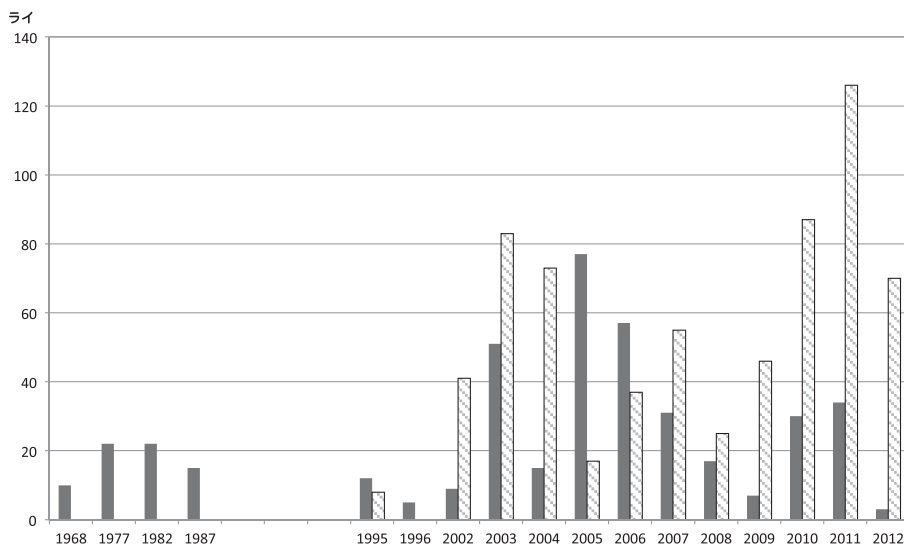


図1 ゴム園の開墾と植栽

出所：2012年に行ったナーコー村109世帯への質問紙調査に基づく。

注：現在のゴム園（59世帯664ライ）の開墾年別内訳（斜線なしの棒）、植栽年別内訳（斜線ありの棒）を示す。

2010 年ごろより、ナーコー村は、毎年、洪水の被害を受けるようになった。雨季に何日も雨が降り続くと、村を南北に流れるセ川（Huai se）が氾濫するのである。村人のなかには、森林の多くがゴム園になったことが洪水の原因だと考える人もいる。

環境をめぐる話題で、森がなくなること以上に人びとが口にするのは農薬による汚染である。特に、ゴムの苗木を植えてから 5 年くらいで樹冠がおおむね閉じるまでの間、雑草が旺盛に繁茂する。このため、特に最初の 2、3 年の間は、除草剤を使う人も少なくない。この除草剤がゴム園から流れ出し、健康被害を出している。ナーコー村では、ゴム園に隣接する森に生えるキノコに農薬が付着し、それを食べて中毒になり死んだ人がこれまでに何人もいるという。そうした事件をきっかけに、人びとは農薬を非常に警戒するようになった。ゴム園の近くでとれたキノコは食べなくなった。誰かが売っているキノコを買って食べることもなくなった。町の仲買業者は、ゴム園より高い土地にあるコミュニティ林でとれたキノコしか買い取らなくなった。川にもゴム園から農薬が流れ込むため、川の魚も危険なので、自分で（池を掘って）養殖して食べたほうが安全だという人もいる。

ポンは、除草剤はゴム液の出が悪くなるのでできれば使いたくない、と言う。しかし、彼も、雑草の繁茂が激しいので使ったことはある。現在、収穫している、オイの父からもらった土地では、植えてから 4、5 年目くらいに 1 度だけ、新しく植えたところでは 2 年目に 1 度だけ除草剤をまいた。ポンは除草剤をまくときは必ず人を雇う。危ないので自分ではやらない。「以前は、病気になる人が出たのでみな怖がって農薬をまかなかったが、3 年くらい前から怖がらなくなった。4、5 年前にまいたときには、隣村のナートーイ村の人を雇った」。ポンは、そう話しながら、悪びれた様子をまったく見せなかった。ところが、（ポンがいない時に）別の村人は、「あなたが寄宿している家の主が（人を雇って農薬をまくことを）やっている」と、非難するような口ぶりだった。

ポンが、「この 3 年くらい、村の人びとが農薬を怖がらなくなった」というのは、村のなかでも農薬散布を請け負う人が出てきたという意味だろうが、実際には、農薬に対する恐怖心が消えたわけでは全くない。ピアオは、「除草剤はまかない。近づきたくない。キノコが食べられなくなる。以前、（他人の）ゴム園に隣接するカシューナッツ園で水牛を放牧していたが、それも危ない」という。彼は、ゴム園の除草をするのに、トラクターを雇うのも節約し、手作業で草刈りをしている。チャックも除草剤は使っていない。「薬をまいたあとを歩くと病気になる」という。彼のゴム園は集落のなかで民家の近くにあるので、村の人たちに害がないようにするための配慮でもある。彼が参加した研修でも、危険なので農薬は勧めなかったという。しかし、このように、農薬を使わないという人ばかりではない。だから、人々の恐怖心もなくなるらない。

ある時、ゴム園近くの雑貨屋の店先でポンに加え、近くにゴム園を持つ数名と話している時

にこの話題に触れると、口々に、語りだした。

「昔は化学薬品を使わなかったので、道端に生えている草でも（食用のものは）食べることができた。でも今は、農薬が着いているかもしれないのでできない」

「昔は水田の端で木が倒れたら、そこにササゲマメやウリなどを植えたが、農薬は一切、使わなかった」

「最近はどこにでも農薬をまく。ゴム、キャッサバほか、販売するために植えている野菜にも。それで皮膚の病気になる人もいる」

「将来は（汚染が）もっとひどくなるだろう。でも、元の生活に戻すことはもうできない」

「最近をよくわからない菌で風邪になる。病院でも『（何かの）菌』としか言われない」

「鶏糞から病気になるというので、水田に（肥料として）鶏糞を入れるのを控える人もいる。（それは）養鶏所の鶏糞を買ってくるから。地鶏（*kai ban*）のものなら大丈夫だけど」

このような会話の流れからは、どこのゴム園から流出した農薬がどこか特定の土地を汚染しているかという具体的な因果関係を超えて、彼らの生活世界全体に農薬汚染が広がっているという恐怖がうかがえる。さらには、新たな菌が出現しているという、農薬とは因果関係が不明瞭なことまでも「世界が汚染されている」ことの一環として関連づけて語られる。一方で、「川の魚は危なくないのか？」ときくと、「川の魚は、水が流れているから大丈夫だ」という。ゴム園よりも高い場所にあるコミュニティ林や流れのある川といった、汚染されていないことが人々の間で経験的に共有されているところだけは安心できる。それ以外のところは、目に見えない汚染への漠然とした不安が拭いきれない。人によって、まく、まかない、の別はあり、それは、各自が所有する空間との関係性、あるいは、それを介したほかの人との関係性を左右する。一方、そうした個別の関係性を超えて、農薬は、それまで汚染がないことが前提だった世界を、汚染の不安を前提に生きる世界に変えたのである。

除草剤については、使ってもよい種類や量について、ゴム研究所が発行する資料にも記載がある〔ゴム研究所 2012: 56〕。しかし、チャックが言うように、研修などでは、積極的に農薬散布を推奨はしていない。とは言え、ゴムの成長を阻害することのないように、除草すること自体は重要である。ゴムの成長が悪くなれば、収入減につながるのだから、草刈りなどで追いつかなければ危険性をわかっているにもかかわらず除草剤を使わざるを得ない。一定の時間が過ぎると、ある程度、気をつければ、除草剤を使っても、急性の中毒のように即時的に目に見える被害は防ぐことができることが経験的に分かってくる。これは、漠然とした汚染の不安を前提に生きる、ということの裏返しである。

V-3 薄れる自然とのつながり

森林が開墾されてゴム園に転換される。残った森林も隣接するゴム園から農薬が流れてくる。

川にも農薬が流れ込み、魚が減る。それだけではない。ゴム園が増えたために牛や水牛を放牧する場所がなくなり、飼育頭数が減った。そのため、水田などに堆肥を入れようと思っても、牛糞が手に入らないという人もいる。また、ゴムのタッピングを休むと、その分、収入が減るので、水田の田植えも、なるべく短時間で終わらせようとする。例えば、ポンなどは、他の人よりも高額の日当を払って多くの人を雇い、田植えを1日で終わらせる。田植えの前の耕起も、かつては、水牛か、せいぜい手で押すタイプの小型のトラクターだった。しかし、最近、ゴムなどの現金収入もあり、運転するタイプのより大型のトラクターが普及した。それによって効率よく耕起できるようになった。大型のトラクターは強く深く耕することができるが、そのため、水田の中や脇に生えていた、新芽を野菜として食べる樹木の実生が生えなくなる。このため、パック・カドーン (*phak kadong*) という、かつてはよく食されていた樹木野菜が、最近ではほとんどなくなってしまったという。このように、ゴム栽培の広がり、それまであった人と自然の生態的なつながりを切断している。

このことは、潜在的な食料源の減少を意味する。村人たちもそれは認識しているものの、現時点では、村の人々が困窮しているという声は聞かなかった。ポンは、「森を開墾して（パイア畑にし、その後、ゴム園にした）、キノコやプアク（イモ）はなくなってしまった。それは惜しい (*siadai*) と思うが、自然はまだまだたくさんある」と言う。ほかの人たちに聞いても、キノコはコミュニティ林で、タケノコは川沿いの土地（所有者はいない）で、魚も水田や川でとれるという。

それ以上に人びとの生活を変えたのは、食べ物を簡単に買うようになったことだ。ピアオは、「*ha kin*（野生のものをとって食べる）することは、環境（がある）という意味ではまだ可能だが、買って食べるほうが簡単だから、多くの人がそちらを選ぶ。所有する土地が少なく収入が低かったり、まだ植えたゴムが収穫するまで成長していない人は、*ha kin* する割合が多いと思う」と言う。ナーコーの隣のチャート村のコミュニティ林長アムヌアイは、「ゴム採取を夜間に行い、それを板にする場合は次の日の昼までかかる。すると疲れてしまい、食べ物を探しに行く時間がとれなくなる」と説明した。例えば、前述のソムティンの場合、すでに30ライのゴム園が収穫可能であり、これを家族労働だけで行っている。彼の一家は、野生の食料を探しに行く時間などなく、米以外の食料はすべて購入する。このように、ゴム栽培を始め、特にタッピングが始まると、生活時間が変わる。また、ゴムに関係する作業に、より多くの労働力を振り向ける。その代わりに、現金収入が増える。日常的に野生の食物をとってくるために時間や労力を割くのではなく、買ってすませることになる。村やその周りでは、食料品を売る店が増え、昼間にクイティアオ（米麺の汁ソバ）を出す食堂が新たに集落から離れたゴム園の中にできた。

ただし、まったく野生のものをとらなくなったわけではない。ポンの家でも、普段、タッピ

ングやその他の農作業に多くの時間と労力を割いている。しかし、私の滞在中にも、家の脇で栽培した野菜のほかに、野生のタケノコの煮物 (*kaeng no mai*) を何度か出してくれた。あるとき、家の冷蔵庫を見ると、下ゆでして皮を剥いたタケノコをビニール袋に入れ、大量に保存してあった。また、別の日には、タッピングを請け負わせている親戚のティアムが森で陸生の貝やカニをとってきてくれたのを一緒に食べた。子どもたちが川で魚をとってくることもあった。他方で、すでにカットされミックスされた野菜を買ってきて炒めたり、蒸し鶏やサイクロック (ソーセージのようなもの) を買ってきて食べることもあった。このように、野生のもの、栽培しているもの、売っているもの、人にもらうもの、と多様な食材がある。購入できるものや機会が増えたため、その選択の幅は以前より大きくなっている。

ゴム栽培が始まるまでにどれくらい周囲の自然環境から食物をとっていたのかを具体的に示す手がかりはない。ただし、私は、同じ区 (タムボン) 内にあり、ナーコー村よりさらに自給色が強い生活を営んでいたゴンカム村で定着調査を行っていた。ゴンカム村の15世帯を対象に2000年に行った食事調査では、調理した料理と、それぞれに使用した食材を、野生のもの、栽培/飼育したもの、購入したものに分け、出現回数をカウントした。その結果は、乾季でも食材の50%以上、雨季ではおよそ80%ほどは自給する (自然のものを採取するか、自ら栽培/飼育したものを食べる) というものだった [藤田 2008]。野生の食材は、タケノコのように、一度に数食分、料理するものが多いのに対し、購入する食物は、1回の食事で食べきる量であったため、回数ではなく量ベースでは、さらに自給度は高かったことになる。前述のナーコー村での質問紙調査では、副食物の由来についても、自然 (野生)、栽培/飼育、購入の割合を2012年時点と2002年 (10年前) のそれぞれについて回答してもらった。回答が得られた102世帯の平均値は、10年前は、雨季では、自然 48.5%、栽培/飼育 19.9%、購入 31.6%、乾季では、それぞれ、43.6%、19.0%、37.3% だった。現在は、雨季では、それぞれ、22.6%、15.3%、62.1%、乾季では、それぞれ、20.7%、15.5%、63.8% だった (図 2-1, 2-2)。

この数字は、村人たちが、現時点で、現在の生活と10年前の生活を比較した印象を示しているに過ぎない。よって、細かな数字の比較検討は有意義ではない。その上で、ゴンカム村での数字と比較すると、10年前の時点で、雨季にはやや自給度が低く、乾季にはやや高い。ナーコー村での質問紙調査では、割合の算出根拠として、回数か量かを特定しなかった。仮に、村人が量ベースで回答したとすると、やはり回数ベースより野生と栽培/飼育の割合が高めに出ると推定される。だとすれば、村人が印象として示した数値は実態から大きくかけ離れたものではないように思われる。いずれにせよ、10年間の生活の変化のなかで、村人たちと自然とのつながりが希薄になり、自然との心理的な距離が広がったことが読み取れる。

経済的誘因から商品作物のモノカルチャー栽培が広がり、森林など自然環境が劣化することは、世界各地で広く見られる。調査地におけるゴム栽培の拡大も、その例外ではない。しかし、

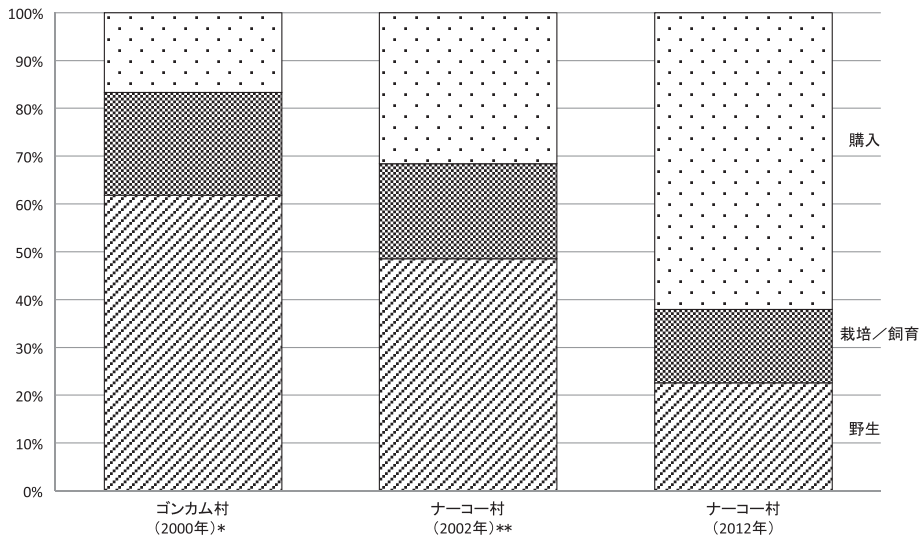


図 2-1 食材の自給度の減少——10 年の変化 雨季

出所：ナーコー村での質問紙調査（2012 年），及び，ゴンカム村での食事調査（2000-01 年）による。

注：* 藤田 [2008] の元データから，他家よりもらったものを除外して計算した割合である。

** 2012 年の質問紙調査で 10 年前について質問した回答にもとづく。

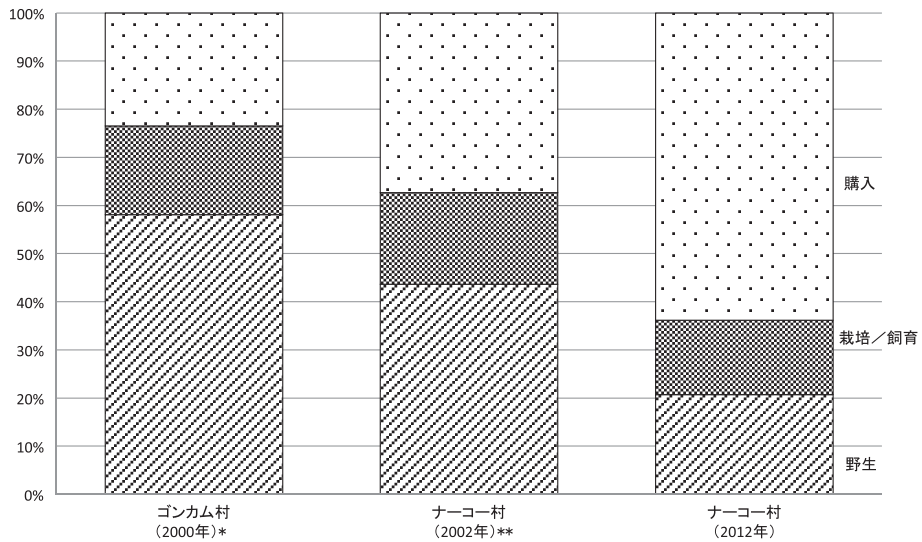


図 2-2 食材の自給度の減少——10 年の変化 乾季

出所：ナーコー村での質問紙調査（2012 年），及び，ゴンカム村での食事調査（2000-01 年）による。

注：* 藤田 [2008] の元データから，他家よりもらったものを除外して計算した割合である。

** 2012 年の質問紙調査で 10 年前について質問した回答にもとづく。

ここでの経済的誘因は、抽象的な意味での収入増ではない。それがもたらす具体的な生活の変化である。ゴムの収入で家を建て、車を買ひ、トラクターを買ひ、出稼ぎに行かなくてもよくなった、という姿を見て、自分もそうなりたいと思い、ゴム栽培を取り入れた。その結果、収益を最大化するための効率的な生産システムが、多様な生物・非生物の関わりあう空間を、同じ種の同じ樹齢のゴムの木だけが等間隔に立ち並ぶ、単調な空間に変えてしまった。かつて、人々は、多様な生き物と生態的なつながりのなかで生きていた。生き物が生きている場での直接的・身体的なものだった人々と生き物との関係が、貨幣が介在する関係に置き換えられてゆく。人々は、周りの生態的な環境からは切り離され、ゴム産業のネットワークに組み込まれ、また、消費者として市場に統合されてゆく。生活世界のなかのさまざまな事物がゴム栽培との関係性を軸にして再編されてゆくのである。調査地は、その途中にある。前節で見たように、周辺環境が汚染されてしまうことに対して、人々は疑問・葛藤を抱きながら、結局は、農薬を禁止することはできなかったのも、こうした再編の過程にあるからだ。金銭的な豊かさを求めることは正しいことだ、という共通認識があり、それが権力として作用したのである。

VI ま と め

VI-1 生態的ネットワークからゴム産業のネットワークへ

これまでの議論を整理してみよう。ナーコー村では、2000年代前半にゴム栽培が急速に広まった。隣の村には1990年代より振興プロジェクトに参加してゴムを栽培していた人がいた。例えばポンー家は、そのなかの一人だった親戚がゴムによって出稼ぎに行かなくても生活していけるだけの十分な現金収入を得ていたのを間近に見て、自らもゴム栽培を始めた。他の人たちも、村内外で先にゴム栽培を行っていた人の暮らしぶりを具体的に目の当たりにすることが契機となってゴム栽培を始めている。ゴムの価格という抽象的な数値が、それがもたらす市場経済的な豊かさとして、村の生活の文脈に沿った形で、家を買ひ、車を買ひ、日々の食材も不自由なく購入できる暮らしぶり、というように翻訳され可視化され、それを見た村人をゴム栽培へと誘う。これがゴム産業のネットワークが拡大してゆく契機である。政府は、市場動向を予測し、東北部でのゴム栽培振興策をとる。これは、調査地で見る限りは、直接的な誘因とはなっていなかった。むしろ、政府機関は、ゴム研究所での技術・知識の開発や、研修を通じてその普及の面で大きな役割を果たした。

ゴム栽培を始めた村人たちがゴム産業のネットワークに組み込まれてゆく際、外部から持ち込まれた関連する各種の知識がインターフェースとしての役割を担った。肥料の種類や施肥法、苗木の品種、タッピングのやり方やタイミングなど、知識の性質や実践する際の1回のサイクルの長さの違いにもよるが、外部からの知識は、それを実践することで経験知化されてゆく。

自己の経験に基づき判断し、適宜、アレンジを加えて実行することができると、その知識への従属は解消される。ただし、解消されるのは、アクターとしてのその知識と農民との権力関係だけだ。まず、効率よくゴムを生産する、というテーゼがある。それに従い、適切な栽培・収穫の方法の大枠がパッケージとして開発される。その先に、その大枠のパッケージのパーツとして、具体的な施肥法、苗木の種類、などといった知識がある。農民は、経験知化することで、末端のパーツの部分身体化し自己の判断で使えるようになる。しかし、それは同時に、効率よいゴム生産というテーゼや栽培方法の大枠のパッケージを内面化し、従属を強めることでもある。

こうした、ゴム生産の効率優先というテーゼは、生活世界全体をそれに沿う形に再編しつつある。ゴム園にするために多くの森林が伐開された。幼木の除草が追いつかないため除草剤を使い、周辺の環境を汚染する。森林が減少したことが洪水を引き起こしているのではないかという疑念が生じる。農薬のかかったキノコを食べた老人が死ぬというようなショッキングな事件や、小川で魚が大量死しているのを目の当たりにすることで、具体的に特定の場所で除草剤を散布したという事実を超えて、漠然と、目に見えない汚染が広がっているという不安が高まる。そのようにして、従来の人と自然の事物との生態的なつながりが絶たれてゆく。ローカルな生活世界における生態的なネットワークが、グローバルなゴム産業のネットワークにより浸食され再編、統合されてゆく。その過程で、人々は、不安を感じる。これは、ツインがいう2つのネットワークの「摩擦」である。しかし、具体的に示された豊かな生活像、それを可能にする効率よいゴム生産とその方法、といった一連のアクターの連なりが持つ権力が、ゴム栽培の拡大に抗するような行動を許さなかったため、摩擦は表面化しなかったのである。

VI-2 抵抗の契機

このように、グローバルなゴム産業のネットワークは、ローカルな生活世界のネットワークを徐々に解体し、自身のネットワークに組み入れ再編してきた。新たにゴム栽培を始めた農民たちは、両方のネットワークの接合点であった。そこで彼らを感じた、変化してゆく生活や環境への不安は、2つのネットワークの間の「摩擦」であった。しかし、基本的には、彼らは、豊かな生活のほうにより強く魅かれ、ローカルな生活世界にあったアクターを、グローバルなネットワークにつないで行った。

このように、グローバルなゴム産業のネットワークが村の人々とその生活世界を侵食し、統合してゆくのは、市場経済のなかで購うことができる物質的な利便性を求める村人自身が選択した結果であることは間違いない。同時に、これまで見てきたような生活世界の変化が、すべて、人々の望み通りだった訳ではない。ネットワーク内に存在する権力関係によって押し切られている部分も少なくない。グローバルなゴム産業のネットワークのなかにあって、ゴム農民

たちは、常にそうした権力に従属しなければならないのだろうか。権力に抵抗する、あるいは、従属から解放される方途はないのだろうか。

ゴムの生産をめぐるのは、効率よくゴムを生産しなければならないというテーゼ、および、そのために開発された栽培方法のパッケージ、という2つのアクターが強い権力を持っている。ゴム栽培が広がった最初の段階から現在に至るまで、調査村の人々にとって、こうした外部の知識のパッケージを受け入れ実践することは当然の前提だった。それ以外の方法は知らなかった。さらに、それらは、農民たちの日常的な実践によって身体化され、強化されている。これに抵抗するためには、まず、効率よくゴムを生産しなければならないというテーゼを相対化しなければならない。つまり、ローカルな生活世界のあるべき姿を、ゴム栽培とのバランスのなかで村人たちが考える必要がある。同時に、ローカルな生態的なネットワークに組み入れられるようなゴム栽培の方法をも見いだす必要がある。

例えば、インドネシアなど東南アジア島嶼部では、現在でも、非常に粗放なゴム栽培が行われている。そこでは、改良品種すら使わず、ラタンやコショウなど、ほかの作物と混植する。そのため、ゴム自体の生産効率は悪いが、さまざまな作物や、焼畑、森林など、それ以外の土地利用ともバランスがとれている。¹⁰⁾ こうした営農形態は、歴史的に、さまざまな商品作物を、在来の土地利用のなかに取り入れてきたからだという [田中 1990]。現在でも、こうした「伝統的」ゴム園を現代的なゴム園と併存させて生業を多様化させる戦略を選好する、という東カリマンタン州のダヤクの人々の事例も報告されている [Inoue *et al.* 2013]。タイでは、パッケージ化された「科学的」栽培が一気に広まり、南部で行われていた粗放なゴム栽培は忘れ去られた。東北部では、「科学的」栽培以外の選択肢は最初からない。これは、島嶼部のような商品作物栽培の長い歴史と経験がなかったためかも知れない。昔の粗放なゴム園に戻るべきだというわけではない。しかし、ゴムだけを見れば効率が悪いが、多様な生業をバランス良く組み合わせ、生態系サービスを維持することで、全体としてより望ましい生活世界を構築する可能性は検討されてよいのではないか。

ナーコー村の人々は、まだ、水田稲作を堅持している。以前より少なくなったとはいえ、まだ、キノコやタケノコ、魚、小動物など、自然から食物を得ることができる。特に、村の共有林の持つ意味は大きい。だから、それを基盤に、再度、ネットワークとそのなかのアクターの権力関係を組み替えることは不可能ではない。現金収入を確保しながらも、それを最優先はさせない。生態的なネットワークを堅持しそこにゴムを取り入れるという逆転の発想で、良好な生活世界を村人たちが構築してゆく。それを可能にする具体的な栽培のあり方を試行し、その結果を身体化しながら改良を加えてゆく。迂遠なようだが、そうすることでしか、グロー

10) 例えば、寺内 [2010] による東カリマンタンのダヤクの人々の事例を参照。

バルな産業や資本の論理から生活全般の安全・安定を守ることはできない。ハラウェイは、愛犬との直接の接触に、外部から人や犬を規定しコントロールする権力への抵抗の契機を見いだした。ナーコー村の人々のゴム栽培を見ていると、身体的な接触は両刃の剣であることがわかる。グローバルなネットワークに従属し、その末端で尖兵としての役割を強めてゆく契機ともなるし、それを相対化し、ローカルな生活世界のネットワークに立脚して抵抗する契機ともなりうる。今はまだ、多くの可能性が残されているが、一層、グローバルなネットワークへの統合が進めば、人々が再構築しうる生活世界の選択肢は限られたものになるであろう。いずれにしても、グローバルとローカルの緊張関係は、その狭間で生きる人々を接点としたネットワークの組み替えとして、振り子のように動いてゆく。グローバル化のなかでの「地域」の姿は、そうしたものとして把握されるのではないだろうか。

付 記

本稿は、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト（基盤・C）「タイ東北部でのゴムとアブラヤシの政治生態学——生態資源との調和と人々の協働に向けて」の成果の一部である。

参 照 文 献

和文

- フーコー, ミシェル. 1986. 『性の歴史 I 知への意志』 渡辺守章 (訳). 東京: 新潮社. (原著 Foucault, Michel. 1976. *La volonté de savoir*. Paris: Gallimard.)
- . 2006. 「統治性」『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』 小林康夫; 石田英敬; 松浦寿輝 (編), 238-277 ページ所収. ちくま学芸文庫. 東京: 筑摩書房.
- 藤田 渡. 2008. 『森を使い、森を守る——タイの森林保護政策と人々の暮らし』 京都: 京都大学学術出版会.
- ハラウェイ, ダナ. 2013. 『犬と人が会おうとき——異種協働のポリティクス』 高橋さきの (訳). 東京: 青土社. (原著 Haraway, Donna J. 2007. *When Species Meet*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.)
- 北原 淳. 1990. 『タイ農村社会論』 東京: 勁草書房.
- こうじや 信三. 2013. 『天然ゴムの歴史——ヘベア樹の世界一周オデッセイから「交通化社会」へ』 京都: 京都大学学術出版会.
- ラトゥール, ブルーノ. 1999. 『科学が作られているとき——人類学的考察』 川崎勝; 高田紀代志 (訳). 東京: 産業図書. (原著 Latour, Bruno. 1987. *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- . 2007. 『科学論の实在——パンドラの希望』 川崎勝; 平川秀幸 (訳). 東京: 産業図書. (原著 Latour, Bruno. 1999. *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- 末廣 昭; 重富真一. 1989. 「天然ゴムの需要構造と輸出戦略——タイにおける『ブリヂストン革命』を中心として」『一次産品問題の新展開——情報化と需要変化への対応』 平島成望 (編), 107-144 ページ所収. 東京: アジア経済研究所.
- 田中耕司. 1990. 「プランテーションと農民農業」『東南アジアの自然生態』 (講座東南アジア学 第2巻) 高谷好一 (編), 241-282 ページ所収. 東京: 弘文堂.

- 田坂敏雄. 1991. 『熱帯林破壊と貧困化の経済学』東京：御茶の水書房.
- 寺内大左. 2010. 「ボルネオ焼畑民の生業戦略——ラタンからゴムへ、そしてアブラヤシへ？」『ローカル・コモンズの可能性——自治と環境の新たな関係』三俣学；菅豊；井上真（編），89-114 ページ所収. 京都：ミネルヴァ書房.
- 英文・タイ語文
- Agrawal, Arun. 2005. *Environmentality: Technologies of Government and the Making of Subjects*. Durham, NC: Duke University Press.
- Chagani, Fayaz. 2014. Critical Political Ecology and the Seductions of Posthumanism. *Journal of Political Ecology* 21: 424-436.
- Disayawanit, Bunchu. 1964. Kan phatana kan tham suan yang nai phrathet thai [タイにおけるゴム農園の発達]. (タマサート大学修士論文)
- Fujita, Wataru. 2013. Islands of the Commons: Community Forests and Ecological Security in Northeast Thai Villages. Paper presented at the 14th Global Conference of the International Association for the Study of Commons.
- Hirsch, Philip. 1990. *Development Dilemmas in Rural Thailand*. Singapore: Oxford University Press.
- Inoue, Makoto; Kawai, Masayuki; Iman, Ndan; Terauchi, Daisuke; Pambudhi, Fadjar; and Mustofa Agung Sardjono. 2013. Implications of Local Peoples' Preferences in Terms of Income Source and Land Use for Indonesia's National REDD-plus Policy: Evidence in East Kalimantan, Indonesia. *International Journal of Environment and Sustainable Development* 12(3): 244-263.
- Khongsin, n. d. *Kan thaithot theknoloyi kan yang nai patchuban lae neanom nai thasawat na* [ゴムの技術普及の現状と将来の傾向]. Bangkok: Rubber Research Institute.
- Latour, Bruno. 2004. *Politics of Nature: How to Bring the Sciences into Democracy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- . 2005. *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Robbins, Paul. 2007. *Lawn People: How Grasses, Weeds, and Chemicals Make Us Who We Are*. Philadelphia: Temple University Press.
- ゴム研究所 (Sathaban wichai yang). 2011. *Kham neanam kan chai pui yang phara pi 2554* [ゴムの施肥へのアドバイス 2011 年版].
- . 2012. *Khomun wicha kan yang phara 2555* [ゴムの専門情報 2012 年版].
- Tsing, Anna Lowenhaupt. 2004. *Friction: An Ethnography of Global Connection*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Willford, Andrew. 2007. Review of *Friction: An Ethnography of Global Connection* by Anna Lowenhaupt Tsing. *Indonesia* 84: 177-182.

(2016 年 1 月 21 日 掲載決定)